

仮面舞踏会



萩原 葉子

中央公論社

仮面舞踏会

一〇〇〇円

©一九八〇

昭和五十五年二月二十日初版印刷
昭和五十五年三月一日初版発行

著 者 萩原 葉子

発行者 高 梨 茂

印刷 奥村印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目八十七

電話 五六一・五九二一

振替 東京二二三四

検印廃止

日本音楽著作権協会（出許諾）

第七九一二五三一号

仮面舞踏会 目次

仮面舞踏会 9

仮面舞踏会 10

*

人形との対話 14

いそぶ・なり 18

鳩

ライオン

ロバ

サーカス 25

「不思議の国のアリス」 28

初めての小説の頃 31

初めての小説の頃 32

私の苦業時代 35

私の遺言 38

遠いこと 42

私の読書遍歴 44

*

「ソライロノハナ」発見 56

女の部屋と私 63

女の部屋と私 64

無智な驚き―私の「キタ・セクスアリス」 67

あがり癖 71

舞 台 74

小さな旅 75

グラウンドの思い出 77

マフラーの行く先 79

パンタロン礼賛 82

手紙と私	84
昔の友人を尋ねて	87
流行歌「仮面舞踏会」	89
自由と夕食	91
椎茸に思うこと	92
私のお正月	94
夏とジャズ・ダンス	97
プラスチックの怪物	99
マンションと私	101
庭の果物	105
観葉植物	107
猫	109
小鳥のこと	111
子供の今昔	113
子供と驢	114

子供の今昔 115

童話とレンジャー 117

若い友達 118

おかしな流行 119

万歳三唱

隠しマイクrophon

運動と無精 123

「父の日」について 126

父親の地位 127

親と子の境目 131

老人の口ぐせ 132

折々に 135

セールスと電話 スピーカー地獄 屏を直

す シルバーシート 東の間の慰安 感

謝 表現の自由 株のこと お中元

黒い靴 謙虚 秋祭 殺人狂時代 外

人の乗客 窓 「サロメ」を観て 実践

寿司店にて コマーシャルとゴキブリ 鮭

水 料理のころ 春 夏 秋 冬

プロフィール 165

双眼写真の子規 166

「刺青」に思うこと 169

私の感傷時代 173

*

室生犀星 181

山岸外史 188

阿部合成 192

宇野千代 195

埴谷雄高 200

吉行淳之介 202

木村 功 204

池田満寿夫 206

スペインの少年 211

紫の衣の美少年との出会い

212

スペインの少年 216

旅と友情 221

牛の無残さ 228

ウンボコ六里 231

スペインの食べもの 234

私の失敗 236

若い踊り手 238

あとがき 242

装
幀
山
高
登

仮面舞踏会

仮面舞踏会

仮面舞踏会という催しは時に見られるが、素面^{すめん}舞踏会は聞いたことがない。もっとも素面というのは生地^{きぢ}の顔のことだから、いつでも人間は素面舞踏会を催していることになるのかも知れない。

人間が自分の顔を自分で見られないように神様がこしらえたのは幸いで、見られるようになれば、毎日自殺者が出て人口が減り、残っているのは厚顔な人間と、美男、美女だけになるだろう。自分の素顔に満足している人も、嫌々つき合っている人も千差万別な思いで、人間は生きている。私がこんなことを考えるのは、自分の顔に飽き飽きしているからで、よくも素面を晒して今日迄生き長らえたものと感心している。

肉眼で顔を見られないということは、何とありがたいことか。鏡で見る時の顔は、決して真実の顔ではない。意識した瞬間の顔である。他人には意識なしの本当の顔を見せているのに、本人には意識した顔しか見せないなど、皮肉である。鏡に向う時の顔は、ワンパターンであり、俳優

みたいな喜怒哀楽を見せることは、めったにない。

人間は若い頃は美しく神様がこしらえた。性格が歪んでいても、意地が悪くても顔には出ない。若さの特権は美しいところにある。

それが年を取ると同時に、醜くなるのは神様の悪戯なのか。美人で定評のあった人も年と共に醜く崩れるのは骨格がないからである。男性は反対に骨格が整っているので、老年に入っても豊饒たる風貌を保つことができるのだ。骨格のない女性性は、惨憺たる存在である。

私などは到底人前に晒せる顔でなく、若い頃から美しさの特権がなかった。中年から踊りを習ったのは仮面をかぶっていられる時間を得られるからである。実際には素面でも、気持の上では仮面を何枚もかぶっている。しかもその日により面の種類を取り替える。踊りによって替えるのではなく、自分の気持で替えるのである。ヒョットコ、鬼、オカメ等気分により、自在に変化させる。時には、美女の面をかぶりたいが、それだけはない。わざと滑稽な面をかぶることに決めているのは、仮令仮面でも美しい面はおこがましいからだ。

踊りの先生は私の仮面を見破り「自意識を捨てなさい」と注意する。仮面をかぶることは自意識の一つなのかも知れなかった。しかし私には捨て切れない自意識なのだった。どうせ捨て切れないのであれば、いろいろな面をかぶって変化をたのしむのも悪くないと、居直る。

顔を人前に晒すことが嫌いな私は、もの心つく頃から醜いと言われ続けたことが原因らしく、鏡を覗いては自分の顔に唾をかけていたことを思い出す。娘時代の写真を見ると、顔を押しかくした陰気な表情の自分が隅に立っている。それでも自殺もしないで生き延びて来たのは、自分の

顔が肉眼で見られないためだろう。

何より人前で話をする講演が嫌いで、半死半生の思いであるが、踊りの時みたいに仮面をかぶってしまいうけにもゆかず、素面まる出しのままなのが、命取りになるほどの疲労を呼ぶ。終わった瞬間は全身ふぬけになり、眼が廻り、頭が混乱し胸がつかえ吐き気を催す。

これに比べ、仮面をかぶれる踊りは、やはりたのしいものだ。フラメンコ、ジャズ・ダンス等私の踊り気違いも歴史が長く、そのくせ少しも上達しない。この間遠慮のない若い踊り友達に「趣味を間違ったのじゃないの」と、言われた。自分では曲りなりにも踊れているつもりなのに、赤面のいたりでこれだから仮面は外せないと思った。

恥かしがりやは、年を取ってもなおらず、テレビ出演の時など素面まる出しのアップで晒される時、この世の地獄に落とされたほどに苦悶する。もし面をつけて出られるのなら、あがることもなく思うことを話せるだろうと思う。子供の時から癖で恥かしい時は、身体をくにかくしゃくねらせ早口になるので、みっともなくて見るに耐えない。

踊りは頭で考えるのでなしに、身体で表現すると言われている。文筆業の文字で表現する仕事に比べ、生身の身体で表現するのが面白い。新鮮な発見であった。踊る時に、頭で考えると一瞬の出遅れとなり、曲が早いのでついてゆけなくなるのだが、身についた習慣は、ぬけないものである。

ついこの間、身体で表現するようになったと、踊りの先生に賞められた。予期しないことに半信半疑のまま喜んだが、落ち着いて考えてみると思い当たるところもあった。仮面をかぶること

を、忘れていたことに気付いた。

自意識に振り廻されるのを止めて、自分をさらけ出し氣を楽に持つことに、成功したのだった。しかも無意識のうちにできたのである。

やはり何事も仮面を外し、素面で突進しなくてはならないのかと思った。醜い素面であっても自前の面で押し切ってこそ、目的に近づける。私は、今日までの歪んだ自意識を振り切り、もっと素直な自分に戻りたいと思った。

所詮、人生とは仮面舞踏会のようなものであれば、気楽に暮した方が得である。

人形との対話

幼い頃、隣りの家にクミ子という瘦せて薄倅そうな少女がいた。ある日私を誘いに来て、自分の家に入れと言った。私は、広い家の内側の暗い様子を感じていたので、嫌だと言った。だが、人形を見せてあげるからと誘われ、恐る恐る家の中へ入ったのだった。その時の異様な空気は、忘れることはできない。

少女の背丈ほどの日本人形は、電気も点いていない（たしかにそう思えた）暗い座敷の真ん中に立っているのだった。その大きくていまにも私の方へ歩き出すか、話しかけそうな様子に驚いた。しかしその時さらに驚いたのは、人形の奥の方に髪をふり乱した老婆が、じっと座っているのに気がついたからだった。蒲団を敷いて寝ているクミ子の祖母さんなのだろう。幽鬼のように見えた。

一目散に逃げ帰った私は、その夜高い熱を出し魘された。大きな日本人形が髪を乱し、裾を乱して歩いて来る夢だった。それからその人形が口を利いたという噂が近所に広まり、やがてクミ